

- 1 課題名 養殖衛生管理体制整備(内水面)
- 2 区分 国交付金(国費：県費＝1：1)
- 3 期間 平成15年度～
- 4 担当 内水面試験地(藤井久之・高橋芳明・中山仁志)
- 5 目的

本県内水面漁業の主幹であるアユ養殖業は16経営体(中間育成場を含む)で、全国第1位の生産量1,243 t(平成20年現在)となっているが、魚病が多発し経営を圧迫する大きな問題となっている。このため、防疫対策の推進と安全な養殖生産物の供給を目的として、養殖アユを中心とした魚病診断・指導、種苗導入直後の保菌検査や医薬品残留検査等を行なった。

6 成果の要約

1) 調査方法

(1) 魚病の診断・指導：アユは養殖業者から診断を依頼されたものや防疫パトロール時に採取したものについて、外部症状や内臓の病変等を観察するとともに、寄生虫の有無を調べ、腎臓から菌分離を行なった。分離菌は抗血清又はPCRにより同定し、必要に応じて薬剤感受性を調べた。ニシキゴイとマゴイは、販売業者や個人愛好家から診断を依頼された検体や河川、ため池でのへい死魚について、菌分離及び病勢鑑定指針によるKHVのPCR検査を行った。

(2) 保菌検査：アユ養殖業者を対象に導入直後の種苗の保菌検査を行なった。対象とした疾病は、冷水病、エドワジェーラ・イクタルリ感染症、ビブリオ病、エロモナス感染症である。

(3) 医薬品残留検査：投薬歴のある出荷直前のアユを対象に平成22年8～9月にスルフィイソゾール、フロルフェニコールの残留検査を行なった。スルフィイソゾールは2業者から採取した各3検体(1検体は同一池から採取した5尾、以下同様)、計6検体、フロルフェニコールは1業者から採取した4検体について、財団法人日本冷凍食品検査協会(関西事業所)に依頼した。

2) 成果の概要

(1) 魚病の診断・指導：平成21年12月から平成22年9月までの疾病検査はアユでは46件で、ビブリオ病(血清型A)が9件で最も多く、次いで冷水病7件、ボケ病7件であった。シュードモナスが平成17年依頼5年振りに4件発生した。KHV検査は、河川のマゴイで3件行い1件が陽性、個人飼育のニシキゴイで8件行い3件が陽性であった。ニシキゴイではKHV以外にカラムナリス病、ギロダクチルスの寄生が1件ずつ発生した。ヘラブナでは釣堀でチョウが寄生し、衰弱した個体からエロモナス菌が検出された事例がみられた。アマゴでは県外から導入した放流用種苗でIHNが発生した(資料1)。薬剤感受性結果は、エロモナス菌は明瞭な傾向がみられず、冷水病菌はスルフィイソゾール、フロルフェニコールに、ビブリオ病菌はオキシリン酸、フロルフェニコール、スルファ

モノメトキシン及びオルメトプリム配合剤にいずれも高い感受性がみられた。シュードモナス菌はいずれの薬剤にも感受性がみられなかった。

(2) 保菌検査：平成21年12月から平成22年3月に9件について保菌検査を実施したところ、いずれも病原細菌は検出されなかった(資料1)。

(3) 医薬品残留検査：スルフィイソゾール6検体、フロルフェニコール4検体について実施したが、いずれも残留は認められなかった。

7 成果の取り扱い

1) 成果の普及

防疫パトロール時に、適宜養殖業者等に指導・普及した。

2) 成果の発表

平成22年度県内養殖衛生対策会議